# カズオ・イシグロの『日の名残り』における語り手の紳士への憧憬

外国語学部 英語英文学科 4 年 **庭田 航太** 

# 序論

カズオ・イシグロの『日の名残り』は、同作者 の長編三作目にあたる作品であり、1989年のブッ カー賞の受賞により作者の知名度を大きく広げた 作品でもある。本作品の主な特徴は、作者の故郷 である日本を舞台とした前二作『遠い山なみの 光』『浮世の画家』と異なり、純粋にイギリスを舞 台としていることと、本作の語り手である執事ス ティーヴンスが読者に対して真実を語らない「信 頼できない語り手」であることの二点が挙げられ るが、私が注目したのは、彼が作中で度々見せる 執事という仕事への情熱・こだわりと上記の「信 頼できない語り手」としての特性との関連である。 スティーヴンスは自らの考える理想の執事像を「品 格ある執事」と表現し、彼の経験する様々なエピ ソードから「品格とは何か? | という自問へと繋 げている。しかし、彼の「信頼できない語り手」 としての特性から鑑みると、この執事への情熱・ こだわりも偽りであり、さらに彼が憧れを抱いて いるのが執事ではなく、彼の仕えるべき英国紳士 に向けられていることがわかる。本論文では、ス ティーヴンスの抱く紳士への憧憬を論証したい。

第一章では、まずスティーヴンスの「信頼できない語り手」としての側面を、作中の二人の重要人物ダーリントン卿とミス・ケントンとの関係から証明していく。この論証によりスティーヴンスの言動が信頼に足るものでないことを強調し、次章からの論証の足掛かりとする。第二章から本格的にスティーヴンスが隠し持つ英国紳士への憧憬を論じる。この章では、主にスティーヴンスの初めてのイギリス西部への旅行中に見られる不自然な言動と、彼の服装の変化との関連について論じる。スティーヴンスは作品の冒頭で、旅行に適う衣服としてかつて屋敷のゲストから譲り受けた紳士服に着替えるのだが、この時に彼は外見だけで

なく、内面までもがあたかも紳士であるかのように変質している。スティーヴンスの不自然な言動はこの外見と内面の対応関係に端を発するものと思われる。第三章では、スティーヴンスと彼の父親であり師匠でもあるスティーヴンス・シニアとの淡白な親子関係に注目する。スティーヴンス・シニアは、スティーヴンスにとっての理想の執事であり、「品格」を体現した人物として紹介されているが、そんな彼に対するスティーヴンスの執とも言える態度は、そのままスティーヴンスの執事への姿勢を表していると解釈できる。以上の概略を基に論証を進めていく。

# 第1章 信頼できない語り手スティーヴンス

この章では、ダーリントン卿とミス・ケントン の二人の重要人物から、スティーヴンスがいかに 信頼できない語り手であるかを考察する。「信頼で きない語り手 とは、何らかの理由(記憶の曖昧さ、 欺瞞、または無意識的な自己防衛本能など) で語 り手の綴るテクストと事実との間にずれが生じる ことで、このずれを知覚した時、読者は語り手を 「信頼できない」と判断し、自ずと行間に隠された 真実を読み解くようになる。まずはダーリントン 卿である。ダーリントン卿はスティーヴンスの前 の雇用主であり、第二次大戦前のイギリスでその 名を知られた名士であると共に、スティーヴンス の価値観や人間性に大きな影響を与えた重要人物 である。スティーヴンス自身も、卿の人柄につい T "I can declare that he was a truly good man at heart, a gentleman through and through" (Ishiguro 64) (私は卿が心底善い方であった、骨の髄まで紳 士であった、と公言してはばかりません)と記し ている。しかし実際は、ダーリントン卿は善良で はあったかもしれないが、その甘さにつけ込まれ、 ナチス勢力に利用されたおよそ優秀とは呼べない 人物だったのだ。彼は、卿の悪評についても "A great deal of nonsense" (Ishiguro 64) (とんでもないでたらめ) と一蹴しているが、旅の途中に見られるスティーヴンスの不自然な言動から、この擁護が偽りであることがわかる。

旅の二日目、ファラデイ氏から借り受けたフォー ドに異常を見たスティーヴンスは、通りがかった ヴィクトリア朝風の邸に仕える運転手に助けを請 う。話をする内に運転手はスティーヴンスがダー リントン・ホールに仕える執事であることを知る のだが、"You mean you actually used to work for that Lord Darlington?" (Ishiguro 126) (では、あ のダーリントン卿の下で働いていたのか)と尋ね られると、スティーヴンスは邸を買ったファラデ イ氏に仕えていると、何とも煮え切らぬ返事をし た。さらには、「そろそろ出発せねば」と話を早々 に切り上げ、運転手とさっさと別れてしまうのだ。 あれ程卿への忠誠を記していたスティーヴンスに しては理解に苦しむ行動である。事実、語り手自 身もこの振舞いを "such distinctly odd behavior" (Ishiguro 128) と認めている。このエピソードは物 語の中盤に語られるものである。作者は、スティー ヴンスの中で、ダーリントン卿への忠誠が既に消 失していることをわかり易く示すことで、読者の 意識を語り手の深層へと導いているのだ。

次に、ダーリントン卿の本質的な人間性が顕わ になる場面を採り上げたい。三日目の夜の手記に て、スティーヴンスはデボン州タビストック近く のモスクムに住むハリー・スミスという男の「み んなが強い意見を持ち、政治において自分の役割 を果たすべきだ」という演説に反応し、過去の記 憶への旅を始める。それは戦前の1935年頃のこ とで、スティーヴンスは、ダーリントン卿が三人 の来客をもてなしているところに呼び出された。 そこで、来客の一人のスペンサー氏が、スティー ヴンスに極めて込み入った政治的質問をする。こ の質問は「民衆に政治を任せるのは愚行だ」とい う意見を証明するために行われたものだが、彼ら は質問に答えられないスティーヴンスを見下し、 笑い者にし、ダーリントン卿もそれを止めもせず ただ見物していたのだ。その次の日、卿はスティー ヴンスに前夜の仕打ちを謝罪するのだが、その直 後に弁解するかのように "Democracy is something for a bygone era," "Look at Germany and Italy."

(Ishiguro 208)と、民主主義の否定とファシズムへの傾倒ぶりを口にする。この時読者は、ダーリントン卿という人間の本質は、スティーヴンスが語るような優秀さや偉大さなどではないと確信する。スティーヴンスもまた、卿のこの発言を"rather odd – even, at times, unattractive"(Ishiguro 209)と控えめながら認めており、言葉とは裏腹に、スティーヴンスのダーリントン卿への見方が、長い年月を経て完全に変容していることを読者に示しているのである。

続いては、ミス・ケントンとの関係について考 察する。ミス・ケントンは、スティーヴンスが回 想する戦前のダーリントン・ホールで女中頭とし て働いていた人物で、この物語の枢軸であるス ティーヴンスのイギリス西部への旅と、それに並 行して描かれるスティーヴンスの記憶の旅が始ま る発端となる人物である。西部への旅行は、ミス・ ケントンから届いた、結婚生活の破綻を仄めかす ような手紙がきっかけとなるのだが、スティーヴ ンスは、その理由がミス・ケントンをダーリント ン・ホールに呼び戻し、邸の人手不足を解消する ことだと強調する。しかし、この主張が偽りで彼 が心の中でミス・ケントンに想いを寄せ続けてい たことは、結婚して長い年月が経った今でも彼女 をミセス・ベンと呼ぶことを拒否していることか らも察せられる。「執事というペルソナの下に隠し つづけた彼女への思い | (平井94) こそが、スティー ヴンスを生涯初めての旅へと向かわせたのだ。

「執事というペルソナ | が最も顕著に現れてい るのが、スティーヴンスが根城としているパン トリーである。作中では、この部屋にミス・ケ ントンが訪れた時の出来事がいくつか語られてい る。中でも二回目に訪れた時には、ミス・ケン トンが執事の仮面を被り続ける彼の心の中に踏 み込もうとするも、彼は"quite firmly"(Ishiguro 176) (断固とした態度で) 彼女を追い出してしま う。この時に彼女は、パントリーを指して "even less accommodating" (Ishiguro 174) (殺風景), "resembles a prison cell" (Ishiguro 174) (まるで 独房)と評している。スティーヴンスにとって、 ダーリントン・ホールとそのパントリーは、執事 としての自らのアイデンティティを守る要塞であ り、またミス・ケントンが的確に指摘したように、 彼の仮面の裏に隠している人間性を閉じ込める

"psychological 'prison'" (Peter 83) なのだ。

また、パントリーの役割そのものが、執事とい う職業の性質と深く関わっていることも指摘して おかなければならない。パントリー(pantry)とは そもそも、執事の管理するグラスや金属器を収納 する部屋であり、その中にはもちろん邸の当主や ゲストが食事をする際に用いられる銀器も含まれ る。そしてこの銀器を完璧に磨き上げ陳列するこ とが、スティーヴンスの世代の執事にとって、極 めて重要な意味を持っていたのだ。スティーヴン スもまた、銀器の重要性について "...it served as a public index of a house's standards." (Ishiguro 142) (銀器の磨きぐあいが、そのお屋敷の水準を 表わすものと受け取られるようになった)と記述 している。また、パントリーそのものについても"a crucial office, the heart of the house's operations" (Ishiguro 173) (お屋敷の運営の中心となる最も重 要な部屋)と位置づけている。以上のことから、 スティーヴンスにとってパントリーとは、執事と しての矜持や喜びなど、あらゆる想いが込められ たある種の聖域のようなものと化していると考え られる。スティーヴンスがミス・ケントンの侵入 に対し過剰に反応したことにはこうした背景も あったのである。

# 第 2 章 スティーヴンスの不自然な行動と 服装との関連

第1章ではダーリントン卿とミス・ケントンの二人に関する語り手の不自然な言動を通し、スティーヴンスの信頼できない語り手の側面を導いた。第2章ではさらに踏み込んで、彼の旅行中の不自然な言動と服装との関連から、彼の抱く英国神士への憧憬を考察したい。The Remains of the Day は、スティーヴンスのミス・ケントンを訪問するための旅行と、その過程で差し挟まれる過去の記憶の回想を軸に物語が展開される。スティーヴンスは、旅の途中に様々な人物と出会い、そして別れることになるのだが、その出会いにおいて実に特徴的な事柄として、スティーヴンスに出会うほとんど全ての人々が、彼を紳士と勘違いしていることが挙げられる。

例えば、物語を読み進めていくと、スティーヴンスが紳士と勘違いされるだけでなく、彼自身が

あたかも紳士のように気品と思いやりのある振る 舞いを要求される場面に行き着く。三日目の夜の こと、スティーヴンスは、車の故障により立ち往 生していたところを近くのモスクムに住むテイ ラー氏に助けられ、その晩をテイラー夫妻の家で 過ごすことになる。テイラー夫妻は、スティーヴ ンスの身なりと上品な話し方から、例によって彼 を紳士と間違えるのだが、それだけでなく彼の到 来をモスクムの他の住人にも知らせてしまう。結 果、モスクムにいた人々が大勢テイラー家を訪れ、 スティーヴンスを紳士と褒め称える事態となる。 スティーヴンスはこの出来事を "rather trying ones" (Ishiguro 168) (じつに厳しい試練) と表現 している。しかし、事態を決定的に悪くした原 因は、スティーヴンス自身の "In fact, I tended to concern myself with international affairs more than domestic ones. Foreign policy, that is to say" (Ishiguro 197) (私自身は、国内問題より国際問題 に重きを置いておりました。いわゆる、外交政策 ですな)という発言に他ならないことは留意して おきたい。スティーヴンスは、この発言について "all I can say is that it seemed somehow called for in the circumstances" (Ishiguro 197) (あの状況の 中では、そのように発言することが私に求められ ているように感じられた)と弁明しているが、果 たしてそうだろうか。国際問題を重視していた、 という発言には、生前に幾度かの非公式な国際会 議を開いたダーリントン卿の存在が背景にあるこ とは間違いない。しかし、長年ダーリントン卿に 仕えた執事であり、卿のへの忠誠心をあらわにし ていたスティーヴンスにとって、ダーリントン卿 を模した紳士を演じることに抵抗は無かったのだ ろうか。そう考えると、スティーヴンスは、弁明 の言葉とは裏腹に、むしろダーリントン卿のよう な紳士を演じることを望んでいたのではないかと 考えることができる。

さて、こうした不自然な行動は、スティーヴンスの服装 (clothing & appearances) と深く関係していると考えられる。スティーヴンスは、品格ある執事、あるいは品格そのものを説明するとき、しばしば服装を比喩的に用いて表現している。

例を挙げると、スティーヴンスは偉大な執事に ついて、感情を押し殺し、自らの職業的あり方に 常住できる執事、と説明した上で以下のように語っ ている。

They wear their professionalism as a decent gentleman will wear his suit: he will not let ruffians or circumstances tear it off him in the public gaze; he will discard it when and only when, he wills to do so, and this will invariably be when he is entirely alone. It is, as I say, a matter of 'dignity'. (Ishiguro 44)

(偉大な執事は、紳士がスーツを着るように執事職を身にまといます。公衆の面前でそれを脱ぎ捨てるような真似は、たとえごろつき相手でも、どんな苦境に陥ったときでも、絶対にいたしません。それを脱ぐのは、みずから脱ごうと思ったとき以外にはなく、それは自分が完全に一人だけのときにかぎられます。まさに「品格」の問題なのです。)

また、モスクムでの「試練」の翌朝のカーライル医師との会話においても、スティーヴンスは品格 を "I suspect it comes down to not removing one's clothing in public" (Ishiguro 221) (結局のところ、公衆の面前で衣服を脱ぎ捨てないことに帰着するのではないかと存じます)と表現している。スティーヴンスにとって、品格と服装は緊密に結びつく存在なのである。

しかしながら、服装は単に比喩的な説明だけに 役割がある訳ではない。物理的な服装の変化もま た、スティーヴンスの内面に影響を与えているの だ。スティーヴンスが旅行中に着ている衣服は、 かつてダーリントン卿や、ダーリントン・ホール でもてなした数々の紳士から譲り受けたスーツで ある。「品格ある執事は、紳士がスーツを着るよう に執事職を身にまとう」と語るスティーヴンスに とって、服装は見た目を表すだけでなく、内面と 深く関係していると考えられる。すなわち、執事 としての衣服を脱ぎ去り、紳士が着るような立派 なスーツを着ることで、スティーヴンスの内面も また、無意識のうちに執事から紳士に変化してい たのである。また、スティーヴンスが長い間ダー リントン・ホールに執事として拘束されていたこ とも重要な点である。それは言い換えれば、それ までの何十年もの間、スティーヴンスが完全に執 事という服を身にまとってきたことを示している からだ。執事以外の生き方を知らないスティーヴンスは、執事服を脱いで最早執事でなくなったとき、代わりに今着ている服を内面に投影した。そこで投影させる服として、あえて旅行には不向きな上等なスーツを選んだところに、スティーヴンスが紳士に憧れ、紳士の服を着ることをずっと望んでいたことが表れている。

最後に、作者カズオ・イシグロの「声」にまつ わる発言に言及したい。イシグロは、作家の持つ 独自のスタイルを「声」という言葉で表現し、自 分の声を初期の作品で見つけたとしつつも、一回 見つければそれで終わりではないと語っている。 さらに、「つねに、どの時点でもそのつど新しい 声を見つけなくちゃいけないんじゃないか」(柴 田 219)、「何年も前には正しかった声に、作家が 固執してしまう。でももはやそれは正しい声では ないのです」(柴田 221) と語り、長い年月の経過 の中で、作家を取り囲む環境も、作家自身も変化 していることを示している。この「声」を「服装| に置き換えると、スティーヴンスに当てはまる表 現となる。すなわち、スティーヴンスは、戦前のダー リントン卿に仕えていたころから数十年間、周囲 の環境や自分自身の変化に対応できずに同じ執事 という服を着てきたのだが、最後の退役執事との 出会いにより古い服を脱ぎ捨て、新しい服を着る ことができたということである。その意味では、 スティーヴンスの旅は彼の新しい服を見つけるた めの旅であったともいえるだろう。

# 第3章 スティーヴンスと父親の心理的隔たり

スティーヴンスが紳士に憧れを抱くようになるもうひとつの要因がスティーヴンス・シニアにある。彼がかつて情熱抱いていた執事への失望が紳士への傾倒の原因として挙げられるのだが、執事への失望の引き金となったのがスティーヴンス・シニアの衰退なのである。スティーヴンスの父親であるスティーヴンス・シニアは、スティーヴンスの執事観に大きな影響を与えた人物である。スティーヴンスが語る父親のエピソードは、自分の息子(スティーヴンスの兄)を犬死させた将校に献身的に仕えた話、スティーヴンスによく語り聞かせたというキッチンに入り込んだトラを冷静に対処した執事の話、自らの主人を侮辱した客人に

断固とした反発の意思を示した話など、しばしば 品格ある執事と結びつけて紹介されている。しか しながら、スティーヴンスの父親に関する描写に は、もうひとつ大きな特徴がある。それは、スティー ヴンス・シニアが、父親としてスティーヴンスに 接したエピソードがほとんどないというものだ。 執事として見た場合、二人の関係はある程度良好 な先輩と後輩の関係と言えるが、家族として見た 場合、二人の関係は極めて曖昧で淡白なものに映っ ている。加えて、スティーヴンスの母親に関する 描写も、作中には全く存在しない。こうした家族 関係の希薄さは、スティーヴンスの人間像に空虚 な印象を与えている。

スティーヴンスとスティーヴンス・シニアの淡 白な親子関係は、二人の会話の場面によく表れて いる。例えば、スティーヴンス・シニアが老齢の ために仕事に支障が出るほど体力が衰えてしまっ たことから、彼の使用人としての仕事を大きく制 限することをスティーヴンスが伝えにいく場面だ。 このとき、スティーヴンスは、会話の中でしばし ば "Father" という三人称を用いている。中に は、"I might have known Father would be up and ready for the day" (Ishiguro 67) (父さんがもう起 きていて、仕事にかかる準備がすっかりできてい ることくらい、わかっていて当然でしたね)や、 "The fact is, Father has become increasingly firm" (Ishiguro 68) (こういうことです、父さん。父さ んは最近とみに弱ってきました) など、"you" で 十分に通じるところをわざわざ "Father" という 言葉に置き換えているところも多々ある。こうし た話し方は、父親と息子の間に交わされる会話と しては、幾分よそよそしく感じられる。また、突 然の戦力外通告に動揺する父親に対し、容赦なく 用件を伝えていくスティーヴンスには、どこか冷 淡さが感じられる。その後の"it was impossible not to be reminded of the sheer impact of physical presence — the very same that has once reduced to drunken gentleman to sobriety" (Ishiguro 69)(父 とこうして向かい合うと、やはり大きな威圧感に ――二人の酔っ払いを正気に返らせたあの威圧感 に――うたれないわけにはまいりません)という 記述から見ても、スティーヴンスが、スティーヴ ンス・シニアを父親でなく執事としてしか見てい なかったのではないかと考えられる。

1923年の国際会議中に体調を悪化させた父親 を見舞う場面においても、スティーヴンスと父親 の隔たりが見られる。この場面には、スティーヴ ンス・シニアが "gazed tiredly at the backs of his hands" (Ishiguro 101) (疲れた表情でじっと手の甲 を見つめていた)という描写が存在する。「手の甲 を見つめる」という行為は、後にミス・ケントン も同様の行為をしているのだが、自分の人生の空 虚さを見つめ、後悔することを象徴している。父 親の"I hope I'd been a good father to you" (Ishiguro 101) (お前にとっても、私がよい父親だったなら いいが)という発言にも、執事という仕事に没頭 するあまり、息子に何もしてやれなかったことへ の後悔が見てとれる。しかし、そんな父親に対す るスティーヴンスの態度は冷たく、父親の語り掛 けに対して、ほとんど全て「父さんの気分がよく なって何よりです」という旨の答えで済ませてい る。頑なに"Father is feeling better"を繰り返す スティーヴンスの様子は、父親との会話を拒絶し ているようにも感じられる。

また、もうひとつ重要な点として、手の甲をじっ と見つめるスティーヴンス・シニアのイメージが、 自らが品格ある執事でないことを認め、悲嘆に暮 れるスティーヴンスのそれと重なることが挙げら れる。さらに、スティーヴンスが初めて父親の 部屋に入ったときの印象が、ミス・ケントンがス ティーヴンスの部屋に抱いた印象と同じ "a prison cell" (Ishiguro 67) であったことも、スティーヴ ンスと父親が同質の存在であることを示してい る。表面上は父親を尊敬し、品格ある執事として 称えるスティーヴンスだが、実際にはこのとき既 に父親の中に品格のないことを悟り、執事として の父親を尊敬の対象から外したのではないだろう か。そしてそれは父親を目標として掲げていたス ティーヴンスにとって、品格ある執事への情熱を 失ったことを意味すると考えられる。

スティーヴンスの父親への失望は、彼の紳士への憧憬とも関わりがある。なぜなら、彼が作中で語っている「品格ある執事」に関する考え方はすべて、彼が人生の節々で父親から語り聞いた、ある優れた執事のエピソードに由来するものであるからだ。この逸話について、スティーヴンスは"I recall listening to him tell it to visitors when I was a child, and then later, when I was starting out as

a footman under his supervision. I remember him relating it again the first time I returned to see him after gaining my first post as butler" (Ishiguro 36) (私がまだ幼かった頃、来客に話しているのを 聞いた覚えがありますし、父の監督下で見習いを はじめたときにも一度聞きました。さらに、私が 初めての執事職を得て、そのあと父に会いに帰っ てきたときにも、同じ話を聞かされました)と語っ ており、幼い頃から品格ある執事像を教え込まれ ていたことがわかる。その結果、スティーヴンス の抱く父親像が、この執事理念と結びついたのだ。 しかし、彼はダーリントン・ホールにて執事とし ての力の衰えた父親と、彼の死を目撃してしまう。 これは、スティーヴンスにとって自らの理想の父 親像と執事理念の双方を揺らがせる重大な出来事 であった。そこで、彼は代償として、当時彼が最 高の紳士と見なし信奉していたダーリントン卿を 理想の父親像に当てはめた。これにより、スティー ヴンスは卿に対して父親的な憧れを抱くようにな り、やがてそれが紳士への憧憬へと変化していっ たのである。

# 結 論

『日の名残り』の語り手スティーヴンスの記述は 一見すると紛うこと無き真実のように思われるが、 旅行中の言動に見られるかつての主ダーリントン 卿への不信感や、執事という仮面の下に隠し続け たミス・ケントンへの想いなどから、彼が「信頼 できない語り手」であることがわかる。物語の随 所でアピールする自らの執事としての矜持も、「信 頼できない語り手」としての特性と照らし合わせ ると違和感が生じるものとなる。執事服から紳士 服へと着替えたことによるスティーヴンスの内面 の変化は、彼の心の奥底にある紳士への憧れを意 味しており、また品格ある執事の代表として読者 に語ったスティーヴンス・シニアに対する冷淡な 態度は、スティーヴンスの執事への失望の表れで ある。こうして書くと、スティーヴンスは他者を 欺き、読者を欺き、そして自らをも欺く救いの無 い人間のように見えるかもしれない。しかし、彼 の紳士への憧憬は自らが歩んできた空虚な人生へ の後悔と、その代償行為とも言うべき他者に成り 代わりたいという願望によるものである。これは 人間であれば誰もが持ち得る普遍的な願望であり、 多くの読者がスティーヴンスの中に自らを重ね、 彼の愚かさも受容することが出来るのである。こ のスティーヴンスの普遍性ゆえに、この作品は多 くの読者の共感を得て名作とみなされるに至った のだろう。

### 参考文献

Ishiguro K. The Remains of the Day. London: Faber and Faber,

Peters S. Remains of the Day, Kazuo Ishiguro: York Notes Advanced.

London: York Press, 2000.

Shaffer, Braian W., and Wong, Cybthia F., ed. Conversation with Kazuo Ishiguro.

Mississippi: University Press of Mississippi, 2008.

イシグロ, K. 『日の名残り』土屋政雄訳, 東京:早川書房, 2001. 柴田元幸『ナイン・インタビューズ 柴田元幸と9人の作家たち』 東京:アルク, 2004.

鈴木宏編『水声通信 no. 26 2008 年 9/10 月合併号 特集 カズ オ・イシグロ』 東京: 水声社, 2008.

田中亮三『図説英国貴族の暮らし』 東京:河出書房新社,2009.

-----『図説英国貴族の城館』 東京:河出書房新社,2008. 平井杏子『カズオ・イシグロ:境界のない世界』 東京:水声社, 2011.

ロッジ, D. 『小説の技巧』柴田元幸, 斎藤兆史訳, 東京:白水社, 1997. 210-215.

メイソン, P. 『英国の紳士』金谷展雄訳, 東京: 晶文社, 1991.